

○「空洞化」で衰えた国はない

——大前研一、田原総一郎著『『勝ち組』の構想力』(2001年7月、PHP研究所)——

本年8月9日付けの日本経済新聞によれば、主要製造業の2社に1社は3年以内に工場の海外移転を計画・検討しているとのこと。失業率が史上最悪の水準となり産業の「空洞化」が危機感をもって語られる中、「今まで空洞化して衰えた国は無い」と断言するのが大前氏です。

本書は、「市場至上主義者」で「強者の論理」の旗手とされる大前氏(本人はそのような評価は「最大の侮辱」と言っていますが。)と、ご存知、田原キャスターとの対談の形式により、現下の不況克服の解決策を示そうとしたものです。

大前氏が「空洞化恐れるべからず」と主張する根拠は以下のようなものです。

労働コストの面で中国と競争して勝てる産業は日本にはない。だから中国と競争するのではなく、自分の競争力の中に中国の競争力を「内包化」すべき、つまり、自社の競争力をつけるのに中国をうまく利用すればいいだけのことである。一方、日本の消費者が支払う価格を100とすれば、生産コストはせいぜい30位で残りの70の部分は知的付加価値の部分(ブランド、ファイナンス、設計・デザイン、アフターサービス等)である。メーカーと言っても実際は7割はサービス産業であって、故に、3割の1部が海外にシフトしようと経済全体に大きな影響はない。

ということで、設計やデザイン(知識産業の部分)は国内に残しつつ製造は全て中国の工場で行っている企業の例を紹介し、「日本をユニクロ化せよ」との極めて分かりやすい結論となっています。

例えば野菜の開発輸入は、正にこの主張に沿った戦略と言えるでしょう。それでは、このような「強者の論理」の文脈の中では、国内の農林水産業を守っていくべきと反論する余地は無いのでしょうか。

本書の別の箇所で大前氏は自動車産業に触れています。自動車産業には「海外移転の兆しはない」としており、その理由として次の

2点をあげています。一つは、自動車は携帯電話等とは違って部品が共通化されておらず、デザイン等の面で特殊なテラーメードの部品が多いことで、言い換えれば、ありきたりの個々の部品を足し上げていった場合の価値よりも特殊な部品を総和した価値の方が高いという自動車の商品特性のためであるとし、ます。もう一つの理由は、自動車は安全性や人命に関わるだけに、安いからと言って簡単に生産を海外にシフトできない事情があるためとしています。

農産物や食品はどうでしょうか。これらこそ部品に分割できないトータルな価値を有する商品であり、かつ、より密接に安全性や人命に関わっていると言えます。この辺りに考えるヒントがあるかも知れません。

なお、本書では農業・農政のあり方についても取り上げられています。大前氏が「鉄鉱石等と同様農業にも最適地があるのだから、食料供給は海外の農場経営に依るべし」と主張するのに対し、田原氏が、「国内農業は食糧安保や環境面からも重要」、「日本文化は農耕民族の文化」等と反論している様子は、対談を盛り上げようとの意図が伺えるとしても、興味深く読まれました。

(りえぞん No.2, 2001/9/10)

○ WTOをグリーン化せよ

——ヒラリー・フレンチ「地球環境ガバナンス」(2000年11月、家の光協会)——

著者は、環境面から持続可能な社会創造に向け「地球白書」を刊行しているワールドウォッチ研究所(レスター・ブラウン理事長)の首席副所長で、専門は「環境保護と持続可能な開発における国際機関の役割」です。

先日、当研究所では著者をお招きし特別研究会を開催しました。参加者からの質問にも、逐一、丁寧に答えていただく真摯な姿は印象深いものでした。今回は、当日の講演内容とも共通点の多い本書のさわりを紹介します。

本書では、国境が消えゆく（原題：VANISHING BORDERS）時代に、U N E P、W T O など国際機関の活動との関連でいかに地球環境を保護していくかという構想が提示されています。

冒頭の章は「グローバリゼーションの光と影」と題され、第2次大戦以降の未曾有の経済成長が物資消費量の急激な増加（水・穀物は3倍、木材は2倍、水産物は5倍）をもたらした、その結果、世界経済は地球の生態系を「極限まで圧迫し始めた」状況を述べています。そして「エコロジカル・フットプリント」という概念（生産に必要な土地面積。輸入品は輸入元での面積を含む。）が紹介され、多くの国が「環境赤字」の状態にあるとしています。また、食料については農場から食卓にのぼるまでの平均距離（フードマイル）が着実に伸びており、英国ではこの20年間で50%余り増えているとの調査結果が引用されています（我が国について試算すれば、恐らくこの傾向は更に顕著なものと思われる）。

また、経済学の欠点として、自然の生態系が与えている重要なサービス（遺伝子資源、洪水防止、授粉、水資源かん養、土壌浸食防止等。ある生態学者、経済学者グループによる試算では世界で年間33兆ドル）を考慮に入れていないことを指摘しています。

このような危機的状況の中、著者は、「経済と政治の国際的構造の中に『環境保護』を組み込むべし」と主張します。W T O についても環境面からの修正を加えるべきとし、具体的には予防原則を明確に組み込むこと、多国間の環境協定がW T O 協定と対立する場合には前者を尊重すること等を提案しています。一方、環境面で有害な補助金削減の問題が取り上げられる可能性があるという面で、W T O に対する期待が表明されています。

もっとも、これらを進めて行くには政府ないし国際機関だけの取組では不十分であり、著者は、N G O とのパートナーシップの重要性を強調するとともに、環境保全のための「地球規模の盛り上がりが必要」として本書を閉じています。

（りえぞん No.3, 2001/9/18）

○ そんなにもあなたはレモンを待ってゐた

——高村光太郎「レモン哀歌」
（「智恵子抄」より）——

農林水産政策研究所がある北区西ヶ原から徒歩で15分ほど、都立染井霊園の一画に高村家の墓があります。赤芽垣に囲まれた墓石の側面には法名が彫り込まれていますが、光太郎と智恵子のそれは訪れた人がなぞるのか、やや判読しづらくなっています。

東京生まれの光太郎が、現在の福島県安達町出身の長沼智恵子と巡り会ったのは明治44（1911）年、3年後、32歳の光太郎は4歳年下の智恵子と結婚します。しかし、次第に智恵子は神経を病み、長い闘病生活の末に昭和13（1938）年、遂に帰らぬ人となりました。その最期を迎えつつある病床の智恵子に、光太郎はレモンを持って行きます。

冒頭のフレーズで始まるこの短い詩。手渡されたレモンを「がりりと噛んだ」智恵子は、その刹那、「トパアズいろの香気」と「数滴の天のものなるレモンの汁」により、にわかに正常な意識を取り戻します。長い闘病生活の間、何とか覚醒してほしいと願っていたのに、何故もっと早くレモンを持って来なかったのか、こんなにもあなたは待っていたのに……。この詩の淡々とした文字の間は、光太郎の烈しい悔恨と悲しみで満たされています。

自然の恵みである農林水産物、その中でも特に果実は、人間の精神や感性に直接訴える力を有しているようです。経済学的に言えば、果実という財は特殊な価値を有しており、その価値は希少性や利便性のみに依存するものではなく、かつ、市場で（貨幣単位のみで）十分に評価するには限界があるものかも知れません。

この詩に限らず、果実をモチーフにした珠玉のような文学小品は数多くあります。芥川は少女に汽車の窓から「暖かな日の色に染まった」蜜柑を投げさせ、太宰は虚勢を張って「珊瑚の首飾りのような」桜桃をむさぼり、梶井は丸善の画集の上に「カーンと冴えかへった黄金色に輝く爆弾」檸檬を置いて立ち去